

## 55 杉田五卿と江戸における文化十年の

## 乳癌手術

松木明知

演者の手元に杉田立卿の「療乳癌記」と題する一版本がある。この本は岩波書店の「補訂版国書総目録」や「古典籍総合目録」にも披見されず、またこれまで発表された杉田立卿関係の論考においても言及されたことはなかった。

まず書誌的に述べると、大きさは縦一九・七センチメートル、横一二・四センチメートル。表、裏の表紙を有する仮綴じ本である。表紙には「療乳癌記」の四文字の題箋がある。表紙と裏表紙の前に各々遊び紙がある。本文は三枚である。第三枚目裏に妻木子敬の他跋が左のようにある。

錦陽先生、頃、療乳癌。因以其記見示焉。予受而読

之。其文雅綉、其事委曲。宛如親從先生、而左右於折肱之場也。予欣慕之餘、騰寫、欲以遍贈同社諸子。因命劄副氏、以省筆研之勞云。

文化癸酉初冬 妻木寛子敬識（句読点 演者）

妻木子敬については詳細は知られるところはないが、彼の他跋によって、杉田立卿が乳癌手術を行った記録を子敬に寄せたが、子敬はこれに感銘を受けて、小冊子として作り、同志に配布したというのである。

本文第一枚目表から第三枚目裏第二行までは立卿の文章である。その概要を記すと、杉田玄白の弟子山本東周は一婦人を杉田玄白に紹介した。玄白が診察すると乳癌であった。幸いにも腋下への転移もしていなかった、全身状態も良かったので、手術治療が可能と判断した。手術には危険が伴うので夫や家族と十分に話し合うよう説得して一旦帰した。十日程して山本東周は患者とその夫を連れて玄白の許を訪れて、改めて手術を懇願した。これを承けて玄白は息子の立卿に手術を命じた。

立卿は清涼瀉心湯を五日間投与した。そして文化十年

(二八一三) 九月十六日に仲間と共に玄白の宅に往き、先ず「麻睡」薬を投与し、それから手術器具を点検した。「麻睡」薬の効果が出現し、患者は意識を消失した。癌の上部から乳頭にかけて、縦二寸、横三寸程切開した。出血も多かったが、漸く癌の根元に達することが出来、一塊として摘出し、残存する癌の小塊一、二も残らず摘出した。主腫瘍の重量は十五匁であった。温めた焼酒を浸した綿布で創内を拭い、創の奥をスポイトで洗浄した。創内に創香油を塗って縫合し、香油を浸した綿布で創口を覆い、圧迫縫帯した。約一ヶ月で全治したという。

華岡青洲の弟子、加賀出身の宮河順達は、江戸に出て、玄白の門に入ったが、その間数人の乳癌手術を行って成功した。

遠くは青洲の思想を尊敬し、近くは宮河氏の巧みな術を目撃し、加えて西洋医学を加味して、遂にこの業を達成することが出来た。これも大平徳化の世のなすところであり、万世の生命のすばらしさであり、喜んで同志に示したい。

以上が立卿の文章の大意である。

右の記述だけでは、患者の氏名、年齢、病悩期間、乳癌部位などは不明である。文中に「家翁」とあるが、彼が「和蘭」を唱えたとあるので「家翁」が立卿の父、玄白であることは間違いない。

この立卿の「療乳嶺記」は、従来全く知られるところがなかった杉田一門による乳癌手術を実証するものである。しかもそれが華岡流の麻酔報法に拠ることを明確に示すものであり、江戸時代以前の日本医学史上注目すべき出来事ではないかと思う。さらにこれによって、何故杉田玄白が一八二二年(文化九)に有名な書簡を青洲に送ったのかの謎も氷解すると思う。

(弘前大学医学部麻酔科)